

江國滋

田舎の奥

きな

22.

4

44
b)
b)
す
人
w
p

昭和十一年

十月十

452

十後力

トキキチ男泣き日記



「夜中にうめが泣く。土井君は、
おれを、おれと見てめ
まわし、こんなすごい
知んば、おれの果てに決着か
つて、おれ、おれとて」

子、こんなす
 くの果てに
 ーは、夢に

वृक्षः

あ　　と
　　う　　と
　　こ　　う
　　れ　　う
　　た　　う
　　ん　　う
　　だ　　う
　　あ　　う

直ぐの33で111に
 追いつくと41の52で

3

祝
優勝

文藝春秋

トラキチ
男泣き日記

江國
滋

文藝春秋

著者略歴

江國 滋（えくに・しげる）

随筆家。昭和9年東京生まれ。後樂園球場に
高射砲がすえつけられ、アンパイアがストライクを「よし一本」とコールしていた頃からのファン歴40年におよぶトラキチ。

著書「わん・つう・すりー／アメリカ阿呆旅行」（文藝春秋）「旅はバレット」（新潮社）
「俳句とあそぶ法」（朝日新聞社）他多数。

トラキチ男泣き日記

昭和六十年十一月十日 第一刷

定価八八〇円

著者 江國 滋（えくに・しげる）

発行者 西 永達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 〇三（二六五）一二一一

郵便番号 一〇〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 凸版製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

夢ちやうか——前書きにかえて

1

バンザーイ、バンザーイ、バンザーイ、〽六甲オローシニィ颯爽オトオ……

2

お断りしておく。この原稿は口述ではない。ちゃんと机に向かって、よろこびにふるえながら書いている。

書くについては、名将吉田義男監督率いるわが阪神タイガースの全員と、日本中のトラキチ同志諸君全員に、心からなる敬意と祝意を表して、この稿だけ大阪弁で書くことにした。

あんじょう書けるやろか。

3

わたし、今年五十一歳になりまんねん。昔やったら、もう隠居しとる年でっせ。そのわいが、ええ年して、タイガースの優勝が決まった瞬間には、涙滂沱^{ほうだ}、宙に舞う背番号81も、じわーっと目の前がうるんで、よう見えんかった。

親の因果が子オに報いで、わし以上のトラキチになりよった二人の娘に、よかったな、いうたりとうても、口をひらくと嗚咽^{おえつ}がこぼれそうになるもんやさかい、声もようかけられへん。そらそうでっしゃろ、娘の前でおやじが号泣したら、ぐつ悪いやんか。

とにかくあの瞬間いうたら、二十一年間の緊張と鬱屈が、すーっ、と溶けて、頭の中がまっ白になってもうた。その空白の中で、ちら、と何を考えた思いはりまっか。

(あーあ、この次、タイガースが優勝するとき、わい、七十二歳やで……)

感きわまると、人間、しょむないこと考えるもんでんな。

次の優勝も二十一年後やなんて、そないなアホなこと、だれが本気で考えまっかいな。屈折心理から、とっきにとびだしたジョークにきまっとるやんか。せやけど、そこまで人間を屈折させたんは、株式会社阪神タイガース球団、あんさんでっせ。

これでひと安心や。

勝負事いうのんは、波にのらなきまへん。長丁場の麻雀といっしょでんがな。ツキに見放されっぱなしで、なんぼがんばってもノー和了と放銃を繰り返してきたあと、ドーン、と国士無双あがってみなはれ、当分ツキまくってオチまへんで。

二十年間ノー和了で、もがきにもがいたあぐくの役満優勝やさかい、これで波にのることはまちがいおまへん。

時あたかも阪神タイガース創立五十周年、昭和六十年のいまこそ、いうたら「タイガース元年」ちゃいまっか。

あ、そや、「タイガース元年」で思いだしたんやけど、まだマジックも灯らんうちに、あれはスポーツ紙やったか雑誌やったか、虎キチのどなたはんかが、いうてはった。

「昭和四十年代は巨人の時代だった、五十年代は広島時代だった、六十年代は阪神の時代です」

うまいこといわはるなあ、と感心したんやけど、はて、何で読んだんやったか、どなたのコメントやったんか、どないしても思いだせんのですわ。思いだせんのが当然でっしゃろ。オールスター・ゲーム終了後から優勝決定までのこの三カ月間、マスコミいうマスコミがタイガース一色に塗りつぶされてもうて、どれがどれやら、わしら、もう頭の中がごっちゃになって、わからん

ようになってもうた。

現に、わたしとにも、ほとんど毎日、それも一日に二本も三本もトラキチの弁を求める電話がかかってきよまして、「野球日記」にも書いたんやけど、なんと、あのこつういやらしいセックス記事で有名な女性雑誌の「微笑」からまで、阪神ファンとしてのコメントを求められて、あれには、わし、びっくりを通りこして、シビレましたわ。

「阪神優勝」——この四文字は、新聞社でいうたら「運動部」を離れて、ついに「社会部」に移ったというても過言やない思いま。

それが証拠に、あのえげつないテレビ局いうテレビ局が、優勝も決まらんうちから「タイガース特番」を競争で放映しとったやないか。三浦和義から吉田義男へ、いうわけや。たかが野球やないか、いうんやったら、たかが三浦やないか。

オリンピックで、あんだだけ日本中が熱狂するぶんには、だれもなんともいわへんけど、あんなもん四年にいったんのことやんか。こっちは二十一年にいったんや。これを「事件」いわずして、ほかに事件がおまっかいな。

日本列島阪神フィーバーいうことになるのは、こらもう社会科学の必然いうべっきやろね。

それにしたかて、フィーバーの度合いが過ぎるんとかうか、とりわけ関西の熱狂ぶりいうたら公害や、いうような「識者」の声も読んだり聞いたりしまっけど、何いうてはりまんねん、二

十一年ぶりやんか、少々ハメはずしたかてええやんか。

全国のトラキチ諸君、わけても関西の同志諸君、識者、とやらの声なんぞ気にせんと、声を限りに「六甲おろし」を歌うて、ハチャメチャにさわごやないですか。

ほな、カンパリー！

4

こんなことになるとは、夢にも思わないまま、掲載誌（「小説推理」『双葉社刊』の需^{もと}めに応じて、足かけ三年前からつけはじめたのがこの「野球日記」である。タイガースのことだけを、だらだら、なおかつ、えんえん書き綴ってもかまわない、といわれてその気になった。要するに「タイガースばやき日記」を書けばいいのだろう。ばやきならまかせておいてほしい。二十年間ばやいていれば、ばやきも芸のうちである。よし、向こう三年でも五年でも、ばやいてばやいて、ばやきまくってやれと思つてスタートしたのである。

それが、こんなことになった。

驚天動地、欣喜雀躍、周章狼狽、呆然自失——という状況下で、足かけ三年の記録を、急遽、一本にすることになった。

ふん、便乗商法のキワモノ出版か、といわれたら、ええ、まあ、それはそうなのです、と答え

ざるをえないけれど、でも——でも、である。「それはそうなのです」であつても、足かけ三年の日記、という歳月を買っていただきたい。マジックが点灯して、それであわてて書き下ろしたというたぐいのものではないのです。その点だけは、いささか自負するところあり、である。

前書きがわりのこのおかしな文章のうち、2と3の項目は、阪神優勝の翌日の「サンケイスポーツ」(大阪版・昭和六十年十月十七日付)に寄せた稿を、ほぼそのまま転載した。

目次

夢ちやうか

Ⅰ

昭和58年

Ⅱ

昭和59年

Ⅲ

昭和60年

Ⅳ

カバー人物イラスト

装幀

山藤章二
高麗隆彦

トラキチ男泣き日記

昭和
58
年

十一月一日(火)晴

「江國滋の野球日記」いよいよ起筆。日記体の連載は久しぶりである。「小説新潮」に四年間連載した「読書日記」の最後の日付は五十五年九月三十日だから、あれからもう三年たったのか、と思う。スタート時から起算したら七年。歳月の早きこと、ただもう、あれよあれよと思うばかりである。

毎月四苦八苦したあのことを忘れたわけではないのだけれど、またひと苦労してみようか、と、ひょいとその気になったところが、つまりは喉元すぎて熱さを忘れている証左かもしれない。

締切りが近づくにつれて、だんだん気が重くなってきた。妙なものを引受けたものだと思うけれども、引受けてしまったのだから仕方がない。「小説推理」編集部のかねて懇意のK編集長と担当編集者のI君に、うまくそそのかされた、といったら言葉が悪い、いいかえよう、うまくのせられた……おんなじか。

K編集長もI君も熱心かつ誠実、その上、説得の技術に長^たけている。

「野球に関することなら、何を書かれてもご自由です。日記の形をとれば、いっそう自由に書けるんじゃないですか」

「なんなら『トラキチ日記』でもかまいませんよ。十九年間（昭和五十八年現在）優勝から見放されっぱなしの阪神ファンとして、鬱憤^{うつげん}の限りを吐きだしていただいてもいいし」

「につきジャイアンツを、毎回、ぼろくそにこきおろして下さってもいいし」

内角高めのストレート、それも打ちごろの速球を、二人でかわるがわる投げてくるもんだから、ついついバットが出てしまった。快音を残してセンター前に抜けるか、ぼてぼてのショートゴロになるか、打球の行方がわかるのは、これからのことである。

（たのむ、抜けてくれッ）

それだけを念じながら、いまはただ、一塁ベースに向かって全力疾走するっきゃない。アウト、セーフの判定は、読者という名の審判にゆだねるとして、この審判のジャッジ、からいからなあ。

十一月十六日（水）晴

夕方から外出。銀座。旭屋書店で野球関係の本をひと山買う。われながらドロなわもいいところ也。七時半三笠会館。K編集長、I君と打合せを兼ねて会食。

西武沿線の住人であるK氏、このあいだの日本シリーズ第六戦を所沢球場で観てきた由、興奮いまだ醒めやらず、といった面持ちで、延長10回裏、西武の代打金森が、どんなふうに入打席に入り、巨人の江川にどんなふうに対して、奇跡の上塗り^{うらぬ}といってもいいサヨナラ安打をどんなふう